2021 冬号

2021年1号 No.4
ニッケ教育研究所　会報誌

未来みらいウォッチ Watch

生き抜く力にあふれた子どもたちを育むコミュニティー

特集

学校力 第3回

― 今こそ発揮されるチーム力 ―

コラム

外見における社会的評価と「らしさ」を考える

インフォメーション

特別講演動画公開のお知らせ
「親子のふれ合いを通して深める学び」

※写真は、クロッカスの花です。

一般社団法人
ニッケ教育研究所
NIKKE Institute of Education

"誰も置き去りにしない"
生き抜く力にあふれた
子どもたちを育むために

【インフォメーション】

特別講演動画公開のお知らせ

勉強って楽しい！　友だちって素敵！　感謝することって大事！　自分が変わっていくってスゴイ！　生きているって最高！
子どもたちとの会話やふれ合いを通して、大人たちも一緒に学び、深めていくことの素晴らしさを実感できるお話です！

ホームページで「講演動画」公開中！

特別講演
「親子のふれ合いを通して深める学び」
講師　森川 正樹 先生《関西学院初等部 教諭》

教育関連の身近なお話を紹介する「コラム」も随時更新中です。
ニッケ教育研究所のホームページを、是非ご覧ください。

https://nikke-edu.org/

一般会員募集

私たちと一緒に、「子どもたちが生き生き伸び伸びすごせる環境づくり」に参加していただけませんか？
子どもたちは"未来の宝"です。私たちが発信する未来の宝を育む情報を、学校・家庭・地域で是非ご活用ください。入会のお申し込みは、ホームページでご案内しています。

編集後記

「自分らしさ」には、「個人としての自分」と「社会の中での自分」が存在すると思います。外部から様々な情報を得て、それらをどの様に捉えるかにより自分の中で個々人の価値観が生まれていきます。そして、それを外部に伝えるために様々な「行動」で表していきます。衣服もそのひとつですし、最近では多くなった災害時のボランティア活動もその一つです。考えれば、衣服も個人の価値観と社会の中での自分の表現であり、この100年間（大正～昭和～平成）でもその時々の社会的背景や生活様式により変化してきました。令和になり、また、コロナ禍という社会的な背景の中で私たちの生活様式が大きく変化し、価値観の変化が加速されると感じています。世の中にあふれている情報の中から正しい情報や正しい知識を得て、子どもたちが、これからの時代の中で、より良い社会を築くために「自分らしさ」を磨いていくことを願っています。

一般社団法人ニッケ教育研究所
理事長　楠本　景央

未来みらいウォッチ Watch
2021 冬号（年4回発行）No.4
2021年1月20日 発行
本紙掲載の記事は、複写・複製・転載を禁じます。

《発行》一般社団法人ニッケ教育研究所
〒541-0048 大阪市中央区瓦町3丁目3-10
TEL: 06-6205-6665　https://nikke-edu.org/

学校力 第3回 ― 今こそ発揮されるチーム力 ―

《ニッケ教育研究所顧問》 勝本 孝夫

元・大阪市立榎本小学校校長（鶴見区）
元・大阪市立姫里小学校校長（西淀川区）

ふりかえり

私は学校力とは、“学校目標を達成させる「チーム力」”と捉えています。教職員一人ひとりの持ち味を生かしながら、学校が目指す方向へ“ワンチーム”としての学校づくりが、今こそ求められているのではないでしょうか。

より学校力を伸ばすために、私のこれまでの学校づくりの経験をもとに、チームづくりの視点を絡めながら、右記の5つのプロセスで述べていきます。夏号掲載の①、秋号掲載の②③に続き、今回冬号は④⑤について述べさせていただきます。

＜学校力構築のプロセス＞

1. スタートは、基本理念の明確化
2. 子ども観の確立
3. 全ては、授業の中に
4. 安全・安心は総合力で築く
5. ゴールは、社会貢献の人材群の輩出

4 安全・安心は総合力で築く

ある冬の寒い日の早朝7時に、当時校長として赴任していた地域の福祉会館に向かいました。毎朝、ここからスタートする児童の登下校を見守る「安全見守りパトロール車」（通称「青パト」）に同乗するためです。私は、常々、子どもを見守る地域の方の思いを“実感したい”と思ってきました。それも最も寒い時期が良いと考えてきました。

助手席に乗ってみると、前の窓が開いており、強い北風がビュービュー入ってくるのです。「どうして、閉めないのですか」との問いかけに、「窓を閉めたら、子どもの顔がはっきり見えないし、声も聞こえない」と、運転していた連合町会長の返答。「わしらは、この学校の子どもは、みんな自分の孫と思っているんですわ」と、子どもにかける熱い思いを語ってくださったのです。実は、この言葉は常日頃から聞いていたのですが、この時に新たな思いが生まれたのを感じ、心の中に“ストーン”と落ちました。その思いとは、**地域の方との連携は、単に言葉ではなく、地域の方の熱い思いを“肌感覚で実感”すること**だとの新たな思いです。

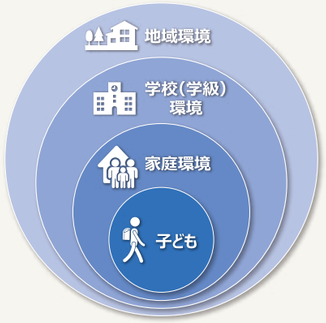
チームづくりの視点

子どもの安全・安心は、学校・保護者・地域の多様な眼差しを持ったネットワークで見ていく

おそらく、どこの教育現場も同じだと思いますが、職員室にかかってくる電話が一番多いのは、月曜日の朝です。「土曜日に道路で危ない遊びをしていたので注意しましたよ」という地域の方や「日曜日、近所の公園に不審者がいたので、警察へ通報しました」という保護者からの電話等々。

何が起こるかが予測できない時代にあって、学校以外の時間を多く過ごす子どもの安全・安心は、保護者・地域の方の協力なくして築けない時代になっています。災害や事故・事件等、さらには、不登校やいじめ・虐待といった“心の悩み”への早期発見のため。また、今のコロナ禍への学校以外からの対応等々。保護者・地域の方の“マンパワー”の必要性は、ますます増していると言えます。**子どもの安全・安心は、学校・保護者・地域の多様な眼差しを持ったネットワークで見ていく**必要があると感じます。つまり、「総合力」で築く時代だとの思いを強くする昨今です。

私は、学校・保護者・地域は、図のような「包み込む関係」になると考えています。横並びでも縦系列でもありません。子どもを中心に据えて、「子ども」⇔「家庭環境」⇔「学校（学級）環境」⇔「地域環境」と、それぞれの円が、子どもを包み込むような形で重なり合っているのです。ここでいう「家庭環境」とは、家庭が子どもにとって心やすらぐ“憩いの場”であるという環境です。「学校（学級）環境」とは、友だちと“学び合い、励まし支え合う”居場所を意味します。そして「地域環境」とは、地域全体が、子どもを見守り慈しむ“温かさに包まれている”環境を指します。



さて、この図で着目すべきことは、学校環境が、家庭環境と地域環境とをつなぎ、橋渡しする所に位置しているということです。これは、“家庭の願い”を地域につなぎ、“地域の思い”を家庭へ橋渡しするのが、学校の責務であることを示しています。また、そのように自覚することにより、学校・家庭・地域の連携が円滑になってくるのではないでしょうか。さらに、視点を変えて考えれば、学校が家庭と地域との“クッション役”として、また “合意形成の推進役”として機能することでもあるのです。

世界の各地で、深刻な分断や差別が憂慮される今、“結び・つなぐ”役割を、子どもの育成を図る教育現場が担っていることに、大きな意味があると思えてなりません。学校がこれまで以上に力を発揮する時代の到来を感じます。さらに、敷衍（ふえん）して考えるならば、PTAの組織は、保護者と学校とを“つなぐ機関”として、今後ますます光を当てていくべきであると痛感します。

今後も、困難・試練が立ちはだかることが予想される社会にあって、子どもの安全・安心のために、学校・家庭・地域がより強固なタッグを組んでいくことが、一層必要ではないでしょうか。

5 ゴールは、 社会貢献の人材群の輩出

二人の少年

今年の3月で東日本大震災から丸10年になります。復興の道のりに思いを致す時、私には二人の少年が、胸に浮かんできます。

一人は、ある雑誌の片隅に載った記事に登場した少年です。大震災後のスーパーストアでのことです。少年がお菓子を手にして、レジの列に並んでいました。ようやくレジを打ってもらう番になった時に、お菓子を元の棚に戻し、そのお金をレジの横にあった募金箱に入れて帰ったのです。募金箱には「東日本大震災義援金箱」と書かれてありました。

もう一人は、被災地・陸前高田市立横田小学校（岩手県）の児童代表の少年です。大震災から3年後、私が当時校長をしていた小学校の事業「花と心の交流」の取り組みとして、現地の横田小中学校へ、花（学校の児童が育てた「忘れな草」）の贈呈式に出向いた時です。贈呈式の最後に児童代表から次のようなお礼の言葉がありました。「私たちは、真心こめて育てていただいた『忘れな草』を大切に育てます。そして、この真心に応える恩返しのためにも、人を助ける力をつけて、成長します。」（要旨）

どうしてこの二人のことを、今なお忘れられないのか。それは、一人目の少年には、私は感動とともに尊敬の念さえ抱いたためです。これまで見聞きしたことのない悲惨な状況に、少額だけれど “今、自分ができる最大の助けになれば” との、止むにやまれぬ少年なりの心情が湧いてきたのでしょう。確かに、お菓子の代金は少額ですが少年にとっては、それが今できる最大の“思いやりの心”の表れだったのです。

もう一人の少年には、少年の“本気で応えていく”心を感じたからです。私の学校の全児童が“被災地への思い”を抱いて、丹精込めて育てた「忘れな草」（被災地を“忘れない”という意味を込めて）を、遠路はるばる大阪から届けに来た・・・。

そのことに対する感謝の言葉が、単なる「ありがとうございます」ではなく、感謝の気持ちを“恩返し”と“人を助けるために成長する”という、具体的な言葉で述べていたからです。訪問した横田小学校では、まだ校庭いっぱいに、仮設住宅がびっしりと建ち並んであり、復興とは程遠い状況でした。子どもたちの心の状態もさぞかし不安定であったに違いありません。それでも、前を向いて歩んでいく健気さ、逞しさに心が震えたのを覚えています。

二人の少年が示したように、子どもには本来“人を思いやる心情”や“人のために尽くす心情”が備わっているのだと思います。その心情をより強く、確固たるものにしていくのが教育だと思います。「教育の成果は、すべてを忘れ去った後に残るもの」とアインシュタインは語っていますが、私は“人を思いやる心情”や“人に尽くす心情”こそ、すべてを忘れ去った後に残る教育の成果であるべきだと思います。

人種や民族、国境を越える“普遍的な行動原理”

物理の法則に「作用反作用の法則」があります。物を押すことによって、反対向きに押し返す力が働くという法則ですが、私はこの法則は、人に尽くす行為と同じだと常々思っています。相手のためにした行為は、そのまま自分に返ってくる。人のために行ったことは、結果、めぐりめぐって、そのまま自分に返り、自分自身が心豊かになっていくということです。

その反対もしかりで、人をさげすむ行為は、結果、自分自身がさげすまれることとなってくる。因果応報という言葉もこのことを意味していると言えます。大事なポイントは、常に“自分からの行為が先にある”ということです。まず、自分から相手のためとなる行為を起こすことが重要なのです。

真の“人に尽くす行為”は、自己犠牲ではなく、自己中心でもない。この行為は、「自他共の幸福」であると私は考えます。まさに“ウィン・ウィン”です。そして、“人に尽くす行為”をする心は、誰人にも本来備わっている。故に、“人に尽くす行為”は、人種や民族、国境を越える“普遍的な行動原理”であると言えます。

世界のところどころで、コロナ禍によって、分断・孤立、差別・格差が深刻の度を増す今、この“人に尽くす行為”が、未来を拓く“カギ”であると思っています。この“カギ”を持って子どもたちが世界へと羽ばたいて欲しいと願います。

学びを支える“社会貢献”への意識

「学問のすすめ」（福沢諭吉）を子どものために分かりやすく書いた「こども『学問のすすめ』」を通して、著者の齋藤 孝氏（明治大学文学部教授）は、“何のために学ぶのか”ということ、つまり、子どもにとっての“学ぶ意味”を次のように述べています。

「勉強するかしないかで、人生がこんなにちがってしまいます。『だから学問が必要なんだ』と諭吉先生は、みんなによびかけたんだよ。」（注1）

「いま日本は大きな災害にあって、とてもたいへんな状態にあります。日本が立ちなおって発展していくためには、みんなが勉強して、知識を身につけ、だいじな仕事について世の中の役にたつことが必要です。

みんなが勉強するのは、自分自身のためだけではなく、世の中のためになるからなんだ。」（注2）

この言葉の中にある「大きな災害」は東日本大震災を指しますが、今のコロナ禍の状況にも、ぴったりとあてはまるのではないでしょうか。

世のため人のためとの意識があると、自分が大きくなる。人のためという気持ちになった時、人はものすごいエネルギーが出て思わぬ力が発揮されると、私はいつも思います。子どもたちの学びの姿勢も“世のため人のため”という社会貢献への思いがあれば、学習意欲も高まってくると言えるのではないでしょうか。

齋藤 孝氏の「世の中の役にたつこと」とは、言い換えれば、「世の中には役割がきちんとある」ということになります。つまり、人それぞれが、世の中から必要とされる人材であるわけです。マザー・テレサは「この世での不幸は“自分は誰からも必要とされていない”ということ」と述べています。心に刻みたい言葉です。

子どもの学力向上は喫緊の課題です。各教科における分かりやすい授業探求は当然ですが、前提となる授業に向かう姿勢を確立するために、「社会貢献への意識」と「誰でも世の中での役割がある」という視点で、学習意欲の喚起を図っていく発想が、今こそ必要であると痛感します。そのための具体として、「人権教育」と「道徳教育」とを絡めて「学習への意欲喚起」を図っていく方策の探求を提案したいと思います。

人は皆、その人しか果たせない“何か”をもっている。誰もが他者のために貢献する“偉大さ”を備えている。私は、そう確信します。

チームづくりの視点

ゴールからの逆算という方向からも戦略を練り上げていく

ゴールからの逆算

本連載の①（2020夏号掲載）で「誰も置き去りにしない」を基本理念にして、学校づくりをスタートさせることを述べましたが、小学校6年間のゴールは、「社会貢献」の心情を抱いて卒業させることです。

そのためには、6年間一貫した学校づくりとともに、長期にわたる学校づくりのプラン構築が必要になってきます。と言っても、学校づくりは、子どもや家庭の実態、コロナ禍のような自然災害、社会情勢等により、プラン通りに進まないのが現実です。しかし、子どもの育成は“待ったなし”の時代です。

では、その現実を打破するにはどのような方策が必要か。それは、**ゴールからの逆算という方向からも戦略を練り上げていく**ことです。つまり、帰納法的に現時点から積み上げていく方向と、演繹的にゴールから逆算していく方向との双方向から、戦略を練り上げていくことです。

持続可能な社会の実現に向けて動き出している今、教育現場でも、「持続可能な学校づくり」の戦略を練っていく時代の到来を感じます。現場事情により異なりますが、現実を踏まえながら、3年・5年・10年単位での長期的なプランづくりが必要ではないでしょうか。当然、一代では為しえるものではない以上、きっちりと次の代へと引き継いで、連綿と「つながりのある学校改革」が為されていかなければならないでしょう。つまり、学校改革は“流れそのもの”という捉え方が必要だと感じます。持続可能な社会の実現に向けて、社会貢献の人材群を輩出していく教育現場であってほしいものです。

毎年絶え間なく、全国津々浦々の学校から、“社会貢献という翼”で子どもたちが羽ばたいていく時、今後も予測不可能な世の中にあって、困難・試練に負けないで、よりもっと“あたたかく、心やさしい”社会へとなっていくのではないでしょうか。

本連載の終了にあたり、ノーベル賞受賞時の山中伸弥教授の言葉で、結びたいと思います。

「重症の患者を助ける方法を探りたい」（医学を志した時の心境）
「本当の意味の社会貢献をしたいという、思いでいっぱいです」（今後の抱負）

おわりに

まだまだ、コロナ禍の終息が見えない中、日々、教育現場での奮闘に汗を流しておられる教職員の方々、また、ご協力いただいている保護者・地域の方々、心から感謝申し上げます。とともに、その献身的なご尽力に尊敬の念を禁じえません。社会貢献と言っても、現実の足元からの取り組みこそが必要ではないでしょうか。それぞれの教育現場の皆さまとともに“今できる、社会貢献の第一歩”を模索していきたいと思います。

（注1） 齋藤 孝「こども『学問のすすめ』」、筑摩書房、2011年11月30日 第1刷発行、19ページから引用。 （注2） 同、20ページから引用。

外見における社会的評価と「らしさ」を考える

《ニッケ教育研究所顧問》 市川 祥子
甲子園大学 心理学部 現代応用心理学科 助教、博士（学術）

今の時期、大学構内でスーツ姿の学生を見かけることが多くなります。普段はカジュアルな服装で友人たちと談笑する姿を見慣れているのもあって、キリっとしたスーツにネクタイ、革靴という装いの学生を見ると良い意味で一瞬誰だかわからないことがあります。そして、身元が判明した時、その緊張感のある顔つきとそれを目にした私の脳内情報処理のバタバタによって、改めて被服の力というものを実感させられます。

被服というのは「纏う者の心理」に影響を及ぼしますが、それを目にする「他者の心理」にも影響を及ぼします。実際、何を纏っているかによって他者からの社会的評価や好感度などが変化し、一般的に社会的評価の高い服装傾向というものがあることも研究から明らかになっています。冠婚葬祭などの式典や格式のあるレストランでのドレスコードは非常にわかりやすい例ですが、私たちは日々の生活の中で自ずと目に見えない社会的規範というものを察知し、その規範から逸脱しないもの、或いは、自らの理想とするイメージから大きく外れないものに対し、安心感と信頼、更には高評価を下すということを繰り返しています。

私の勤務する大学に学校制服はありません（短期大学にはあります）。日本の多くの大学では学校制服は導入されていませんから、通常学生たちは思い思いの服装で登学してきます。幸いにも!?「とんちんかん」な衣服を着てくる学生はおりませんが、では一定の社会的規範から逸脱しない「学生らしい服装」というのはどういうものなのでしょうか。この「らしさ」というのはとても厄介なもので、個性という大義名分の下にどんな被服でも歓迎されるのかというと、先ほどの社会的評価という観点から考えても残念ながらそうはいかない側面を持っているようです。勿論、それも含めて本人がそれをよしとするならば「自由」であることに何の異論もないわけですが、周囲はよくも悪くも否応なしに様々な思いを抱えることになるのは、被服がその人物の印象形成や社会的評価に大きな役割を果たしているからなのです。

さて、「らしさ」というものを外から見た時、私たちはそこに何を求めているのでしょうか？ ここで少し社会心理学的なお話をさせて頂くと、実は、非常に自由な発想で捉えられがちな「自分らしさ」というものと、社会との関係の中で求められる「らしさ」というものは切っても切れない関係にあります。私たちは、何かしらの社会的カテゴリーに属しており、その社会的カテゴリーが持つある種のイメージを自分自身と結びつけることによって自己のイメージを形成していきます。これを「社会的アイデンティティ」と呼びます（一方、自身の能力や趣味、価値観といったものによって形成されるアイデンティティを「個人的アイデンティティ」と呼びます）。しかも、自分はこの世界において一体何者であるのかという社会との結びつきの中で自覚する「社会的アイデンティティ」は、自身の在り方や価値観の形成とも深く関わっています。「社会的アイデンティティ」の形成は、一見社会から切り離して捉えがちな「自分らしさ」というものを私たちに意識させながら社会との繋がりをも見出すことができるとても重要なものなのです。学校制服というのは、社会との繋がりを明確に表現したものであり、ある種の社会的イメージを私たちに提供してくれる存在になり得るものです。このような視点に立って考えてみると、学校制服は、子どもたちが自分はどこに所属し、どこと繋がり、どのような存在であるのか、そして何者であるのかということを意識するためのツールになり得ると考えることができるのではないでしょうか。アイデンティティは児童期から本格的に確立されていきます。この自己形成における重要な時期に、子どもたちが何を纏うのかという問題は、単なる好みや大人たちの都合だけで片付けてはならない問題であると考える必要があります。子どもたちが社会との結びつきを実感し、自分の居場所を見つけることができる、そして、その中でポジティブな「（自分）らしさ」を構築できるような環境はどのようなものであるか、社会的ツールとしての学校制服のあり方を改めて考えて頂けたらと思います。